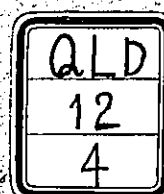


日本農民 建設

国立保健医療科学院蔵書



10012217



石原憲治著

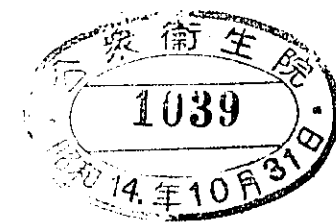
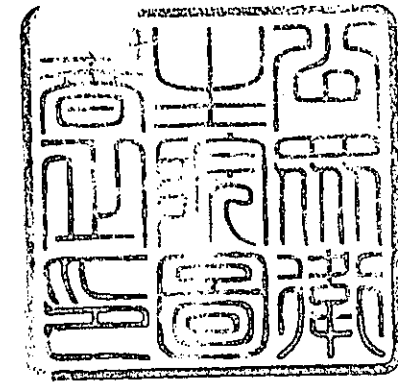
日本農民建策

第十輯



聚樂社刊

QLD
12
4



內 容 目 次

圖版目次

第一	母家前面、側面	(東京府西多摩郡小河内村吉野七郎氏)
第二	母家全景	(東京府西多摩郡小河内村小澤彌氏)
第三	側面、座敷内部	(同上)
第四	聚落景觀	(東京府西多摩郡小河内村)
第五	母家全景	(東京府南多摩郡恩方村渡邊治郎氏)
第六	母家全景	(東京府南多摩郡多摩村富澤政賢氏)
第七	台所及廣間、台所	(同上)
第八	母家全景、台所	(東京府南多摩郡多摩村小川龜太郎氏)
第九	室前面及背面	(東京府南多摩郡多摩村某氏)
第一〇	母家全景	(東京府大島岡田村川島淺太郎氏)
第一一	アラト及チエト	(同上)
第一二	聚落景觀	(東京府大島岡田村)
第一三	母家全景、アラト及太郎元	(東京府新嶋本村津山晉吉氏)
第一四	石藏、物置	(東京府新嶋本村山口利平氏)
第一五	母家全景	(東京府八丈島大賀郷村奥村善三郎氏)
第一六	高倉、同細部	(同上)

第一七	母家全景	(埼玉縣北葛飾郡幸行村遠藤柳作氏)
第一八	門	(同上)
第一九	母家全景	(埼玉縣北葛飾郡幸行村關根太右衛門氏)
第二〇	台所	(同上)
第二一	宅地全景	(埼玉縣秩父郡皆野村小池敬一氏)
第二二	母家側面	(同上)
第二三	母家全景、座敷	(埼玉縣秩父郡皆野村新井助次郎氏)
第二四	母家全景	(埼玉縣秩父郡皆野村某氏)

解説目次

東京府下の概観	一
図版解説	七
埼玉縣下の概観	二九
図版解説	三七

東京府

府下の概観

東京府は武藏國の南半分と伊豆七島並に小笠原列島等の島嶼から成つて居るが、是れを農家の分布形式から見ると大體に於て中央の北多摩郡以西の所謂三多摩地方と、東半の東京市を周る周圍の諸郡の地方と、更に伊豆の島嶼地方の三つに大別することが出来る。

武藏國は北半の九郡が埼玉縣に、南半の八郡が東京府に屬し、更に神奈川縣に三郡所屬して居るが、農家の分布から見ると兩者離すべからざる關係にあり、武藏國を一體として見る方が適當である。既に山梨縣の概観で少しく説明しておいた様に三多摩地方から秩父並に入間郡地方にかけて破風を棟端に取り付けた入母屋造りの屋根が分布して居るが、特に多摩川の西方一帯の山地諸部落には大きな立派な破風造りが見られるのである。

我國の歴史を見ると上代の頃三韓より百濟、高麗、新羅人が多數投化し畿内を初め東國の閑地に置かれたが、奈良朝の靈龜二年に東國七ヶ國の高麗人を武藏に移して高麗郡を置かれた事であるから、遠く三韓の文化が此の地方に傳承され、我國の上代文化と混合して今日の形式となつたものであらう。高麗村には若光王を高麗神社に祀り、又その墓を王廟とさへ稱えて居る位だから、高麗の貴族文化が傳承され、同時に入母屋が此の地方の住居形式に傳承されたものに相違ない。是れを全國的に見ても畿内地方の入母屋造は當然考へられる事であるが、上代文化の移植された奥州中尊寺附近一帯にも此の形式の入母屋造りが分布して居る事は此の事實を證するものであると思ふ。

武藏の入母屋造り分布は神奈川縣の東部及び、山梨縣の隣接郡に擴つて居ることは夫々前輯で述べ且つ圖版で示した通りである。

間取は多摩川西部の山地部落は廣間の座敷を中心として發達し、最小型は間取挿繪第四圖の如く上ミ手にヘヤミデ

イを取り、下モ手に勝手をとつた原型に属した間取があり、更に大きくなると中央の座敷の後に部屋を取り、上ミ手には前方にトバノデイをその後にはオクノデイを即ち鍵座敷の形式に配置し、床の間がその正面に前面向きにある。(挿

繪間取第五圖、第六圖参照) 鍵座敷には廻り縁を設けるのが普通である。又少し大きい家には部屋の下モ手に土間の臺所(又はデエドコといふ)の後に勝手を取る。此の場合ダイドコは大黒柱から前の半分丈けになつて居り、土間は裏に通つて居らぬ。(例、圖版第二、小河内村小澤彌氏宅) 彼様にして原型乃至廣間型の間取の型式をして鍵座敷を有して居るのが普通であるが、是と同時に(例、圖版第一小河内村字日指吉野七郎氏宅) 甲斐の國中地方の例で説明した様に整型間取で鍵座敷を有して居るものも少數見られる。然し臺所とその後の勝手部分は山地では何れも同様な形式であり且つ勝手にヒチロを設けてある。是れを山梨縣の圖版第五の解説に説明した北都留郡丹波山村木下昌訓氏宅の間取と比較すると何れも奥多摩溪谷の間取の形式の特性を理解出来ると思ふ。尤も小さい家では整型四間取で前座敷となり、その後には部屋を取つたものとなつて居る。(例、圖版第八、南多摩郡多摩村小川龜太郎氏宅) 是れは單純な型式であるが、廻り縁がついて居る。然し更に單純なものは前方丈けに縁があつて西側は外壁になつて居る。

一般に多摩川の下流に近い南多摩郡の東南方の部落及び、是れに隣接する相模の諸郡部地方に此の様な整型前座敷が多くなり、更に大きい間取のものに整型鍵座敷が見られる事は神奈川縣下の概觀に説明した通りである。(間取挿繪第一圖、第二圖、第三圖参照)

次に構造を見ると大體山梨縣の圖版第五の解説に述べた通りであるが、屋根裏に二階及び三階を設ける場合には大黒柱を二階天井迄通してその上に梁を渡し、サスを組みのが普通で、此の場合棟木の下に束を立てぬ、此の點は甲州のものと相違してゐる。是れは圖版第二の小澤彌氏の構造と丹波山村木下氏のそれとを比較して見ると明である。

府下東半の部分は西半に比して土地が低く平原地帯をなして居るが、此の地方では屋根は四注をなし極めて單純である。是れは中央線によつて多摩川縁の日野町より漸次に東方に進むに従つて屋根の形の變化を明かに見る事が出来る。

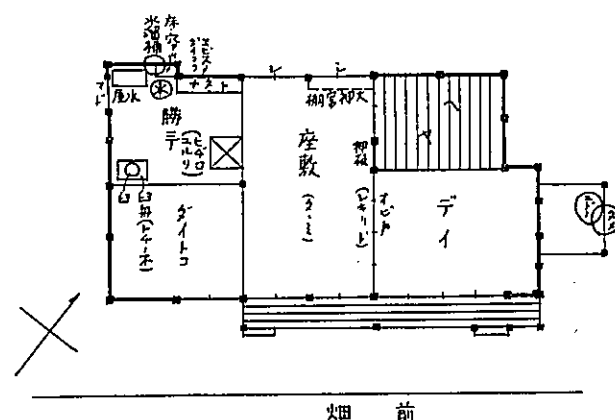
る。即ち、日野町附近には入母屋が多く見られるが國分寺附近から東には殆んど見られず、何れも四注屋根になつて居る。一般に荒川並に利根川流域の關東平原一帯はその地形が一樣である様に間取構造外觀共に甚だしい變化が無い。

間取は一般に整型前座敷及び大きな家では鍵座敷となつて居る。是れらは埼玉縣の例に於て一層精しく説明したいと思ふ。

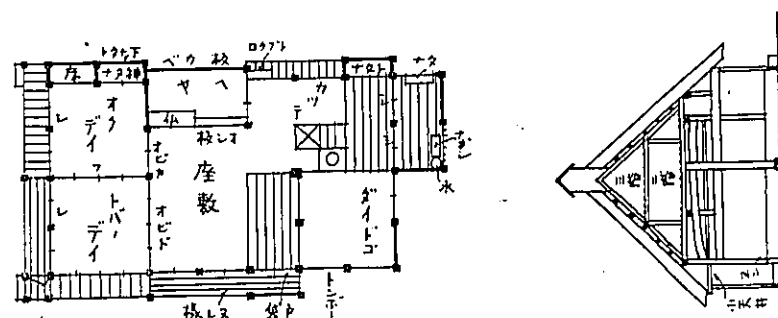
伊豆七島の中で著しい特色を持つて居るものは八丈島である。八丈島の家は沖繩と同様に住家に土間がなく高床柱家の形式をなし、炊事は屋外に石を築いて作つたヘツツイである。間取は内間と外間の二室が併列になつたものと更に内間の後に調臺を取つたものがある。外間にはユルキが切つてある。圖版第十五奥山権三郎氏宅の家はその一例であるが、此の家の下手横に高倉があり、其後の方の屋外にヘツツイがある。

此の様に住家が高床造りになつており、屋外に炊事場を設け、又高倉を設ける風習は我國では沖繩にあり、又我國の近海ではポリネシア、ミクロネシアに最も多く見られる所である。ミクロネシアのバラツ、トルック其他では屋外の炊事小屋があり、ポリネシアでは家の中の爐は炊事に用ゐず、屋外で石を焼いて炊事するものが多い。此の焼石を利用する調理方法は最も原始的な方法に相違ないが、是が漸次發達すると屋外の釜となり、次で別棟の炊事小屋になるのであると思ふ。

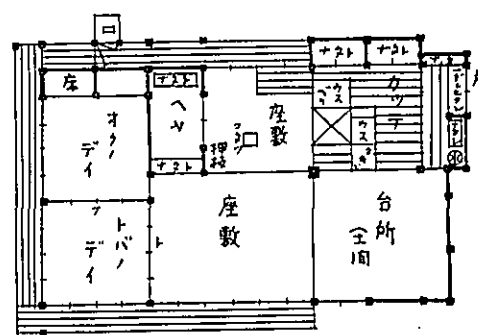
伊豆の新島は有名な坑火石の産地であるが、此處には坑火石を屋根瓦の代りに用ひ、又壁體に張り付けた石造倉の立派なものがある。又新島及び大島の住家は比較的古い住居形式を今尚ほ保存して居るものがある。(圖版第十及び第十三参照) 是れは三室の原始形に属するもので八丈島の奥山氏の住宅の形式と同一であるが、新島及び大島の住家には土間が附いて居り、我國古代の農民住居形式と一致して居るものである。是れは既に各地方に於て屢々説明したところである。唯孤島で特有の生活環境に置かれた爲めに室内構成の部分的細部の手法に地方的技巧が加つて居るのが特色であると云へよう。



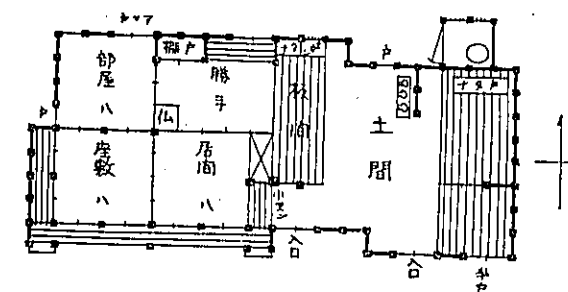
型原(四)
(村内河小郡摩多西)



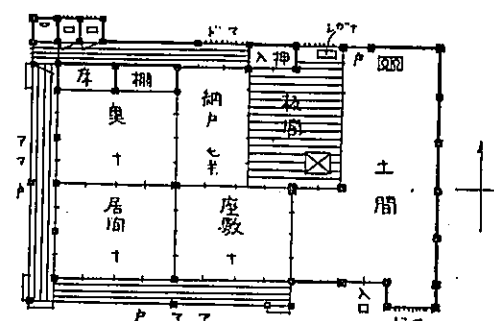
型違喰(五)
(村内河小郡摩多西)



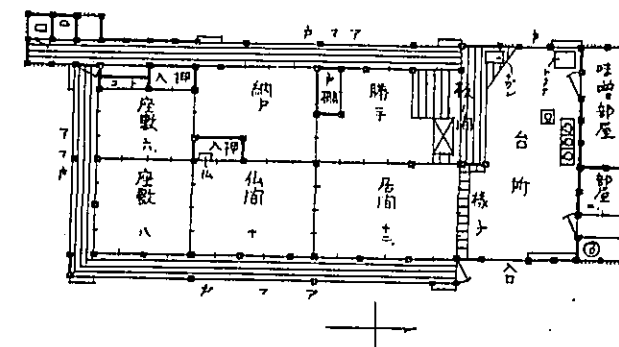
型間廣(六)
(村内河小郡摩多西)



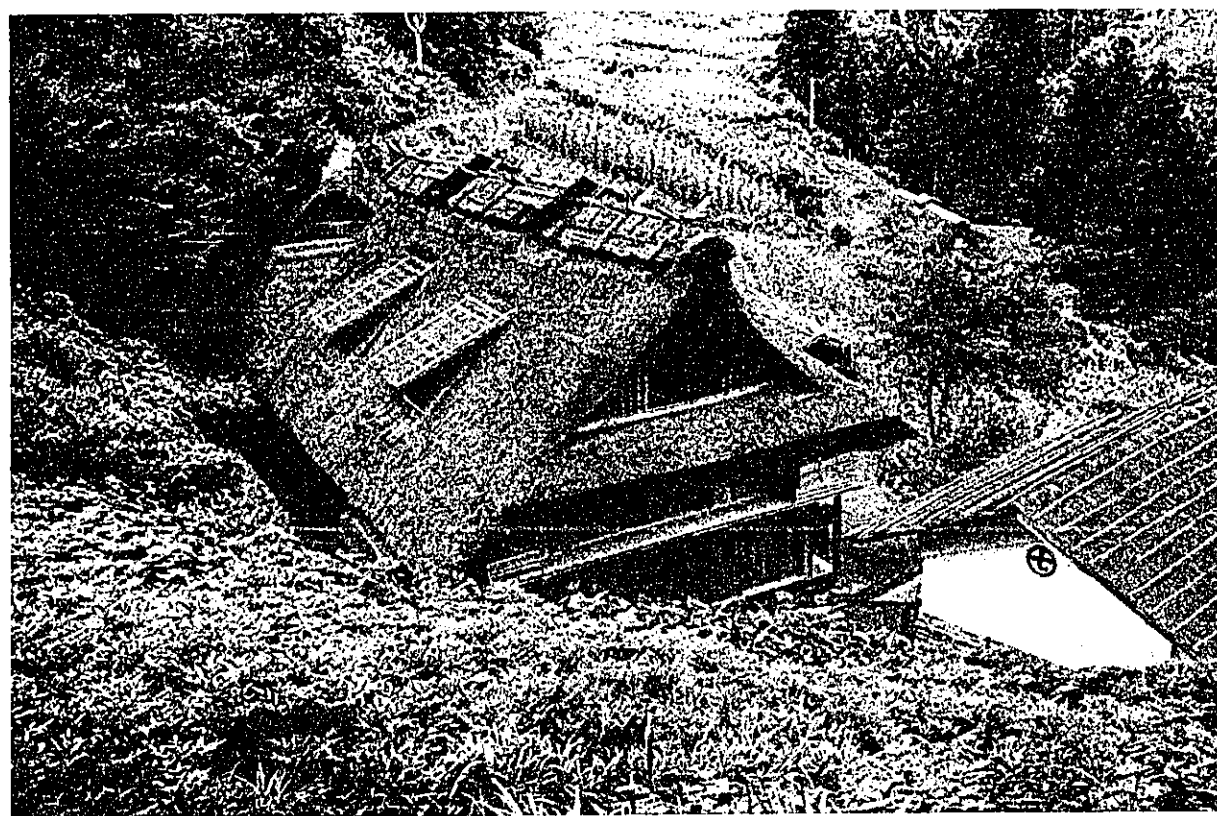
2x2 型盤(一)
(村井金小郡摩多北)



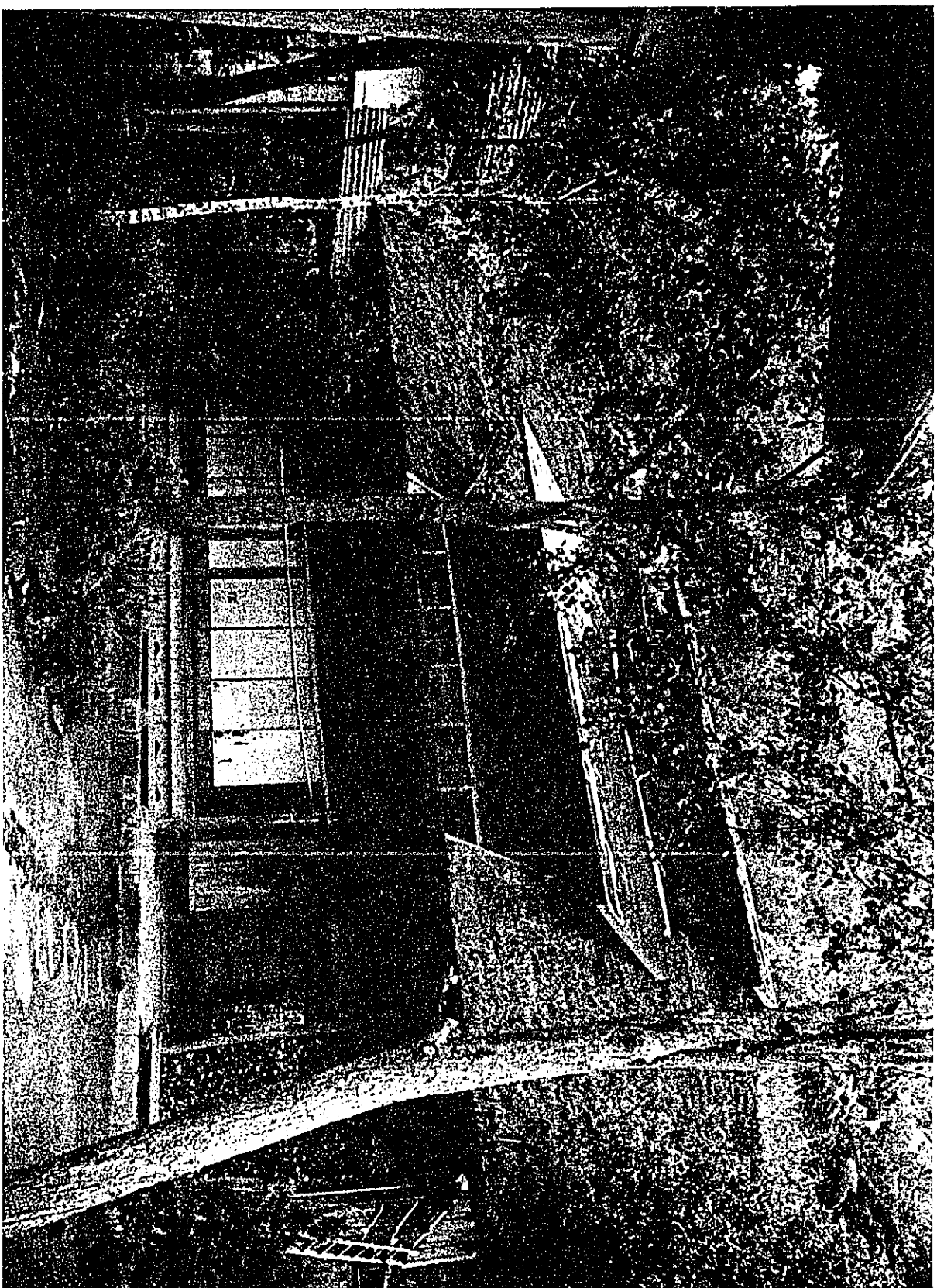
2x2 變型盤(二)
(村宮小郡摩多南)



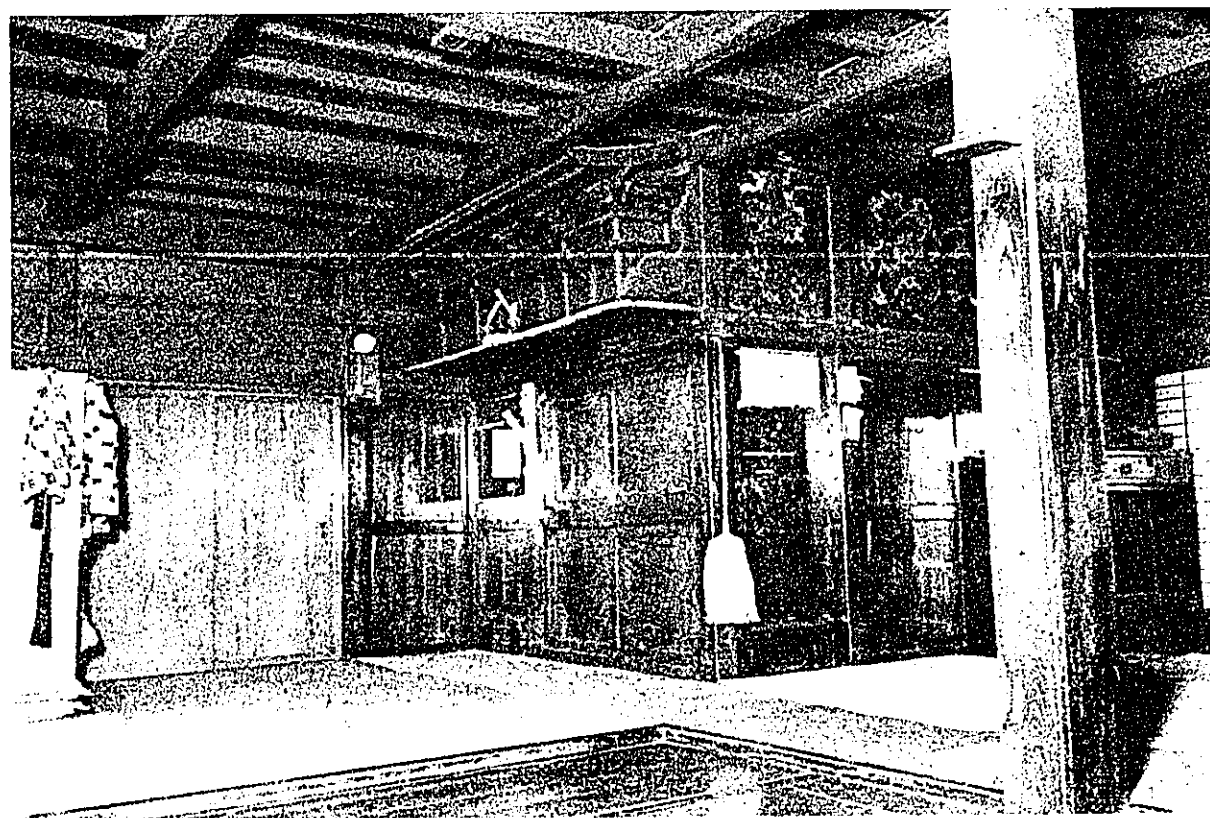
2x3 型盤(三)
(村磨三郡摩多北)



小河内村 吉野七郎氏
1



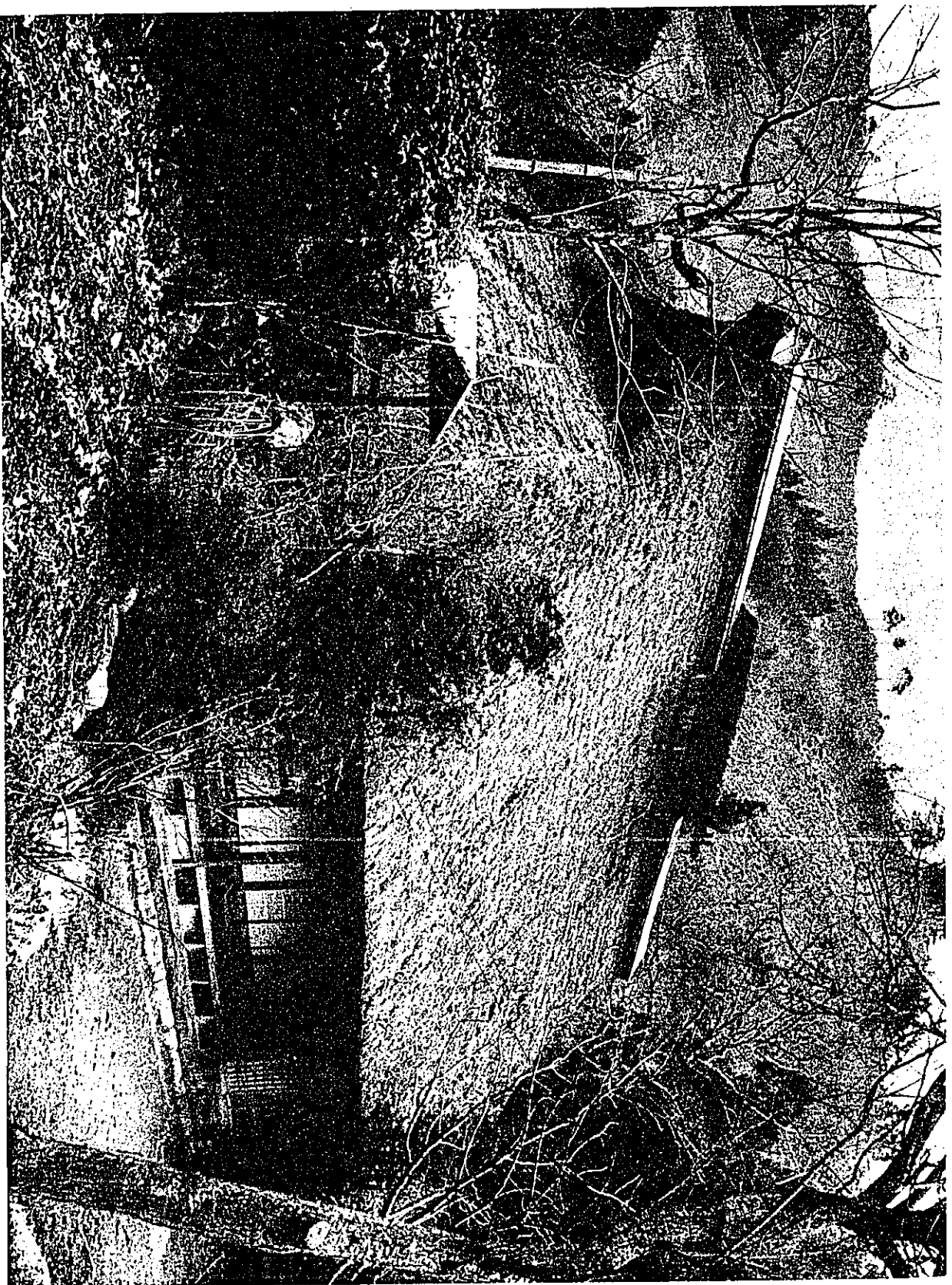
小河内村 小澤 彌氏 2



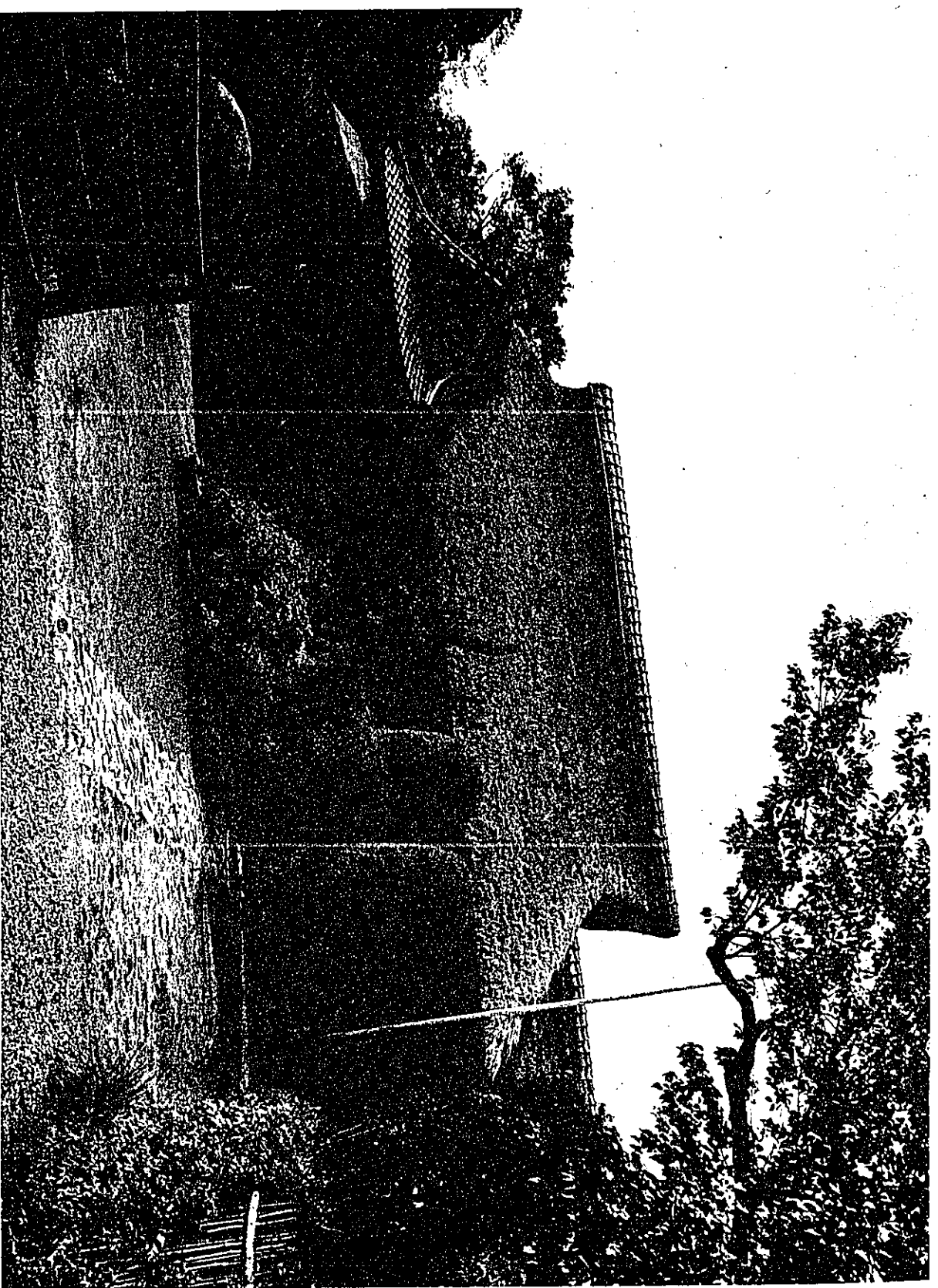
小河内村 小澤彌氏 3



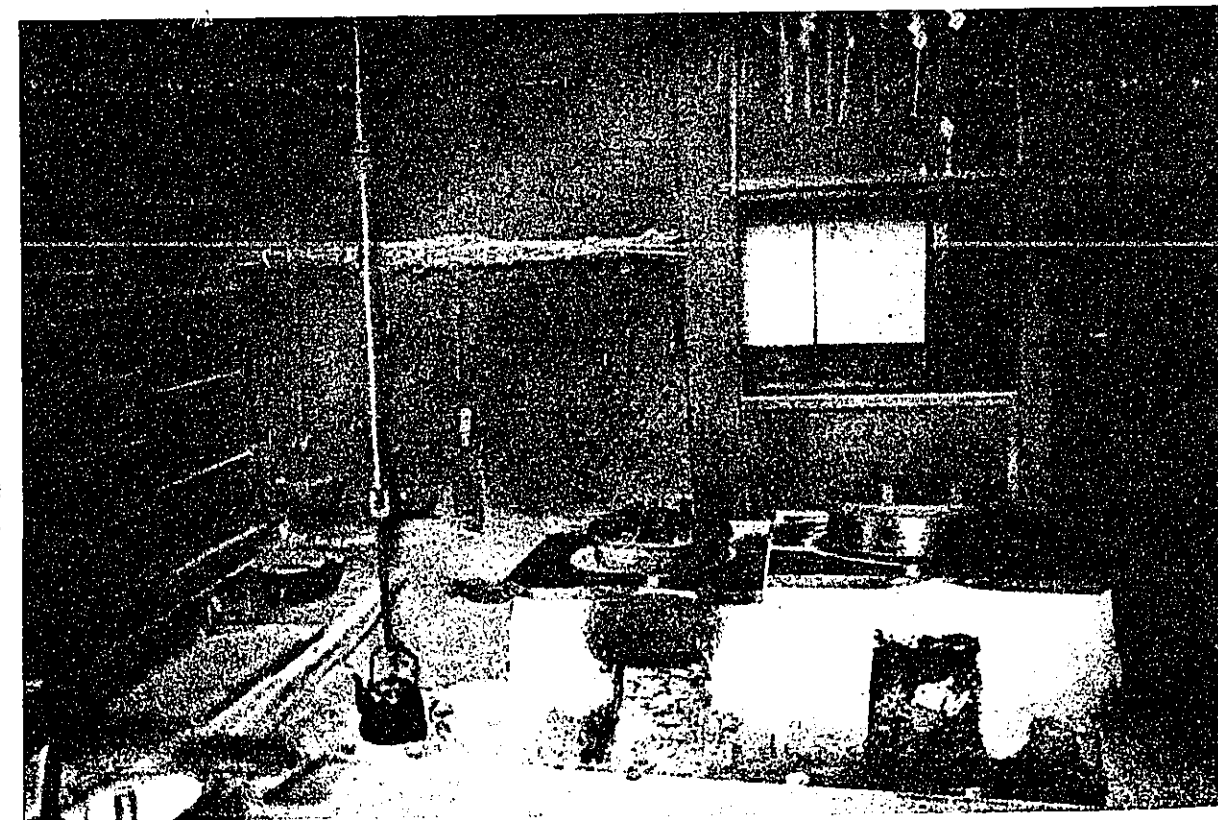
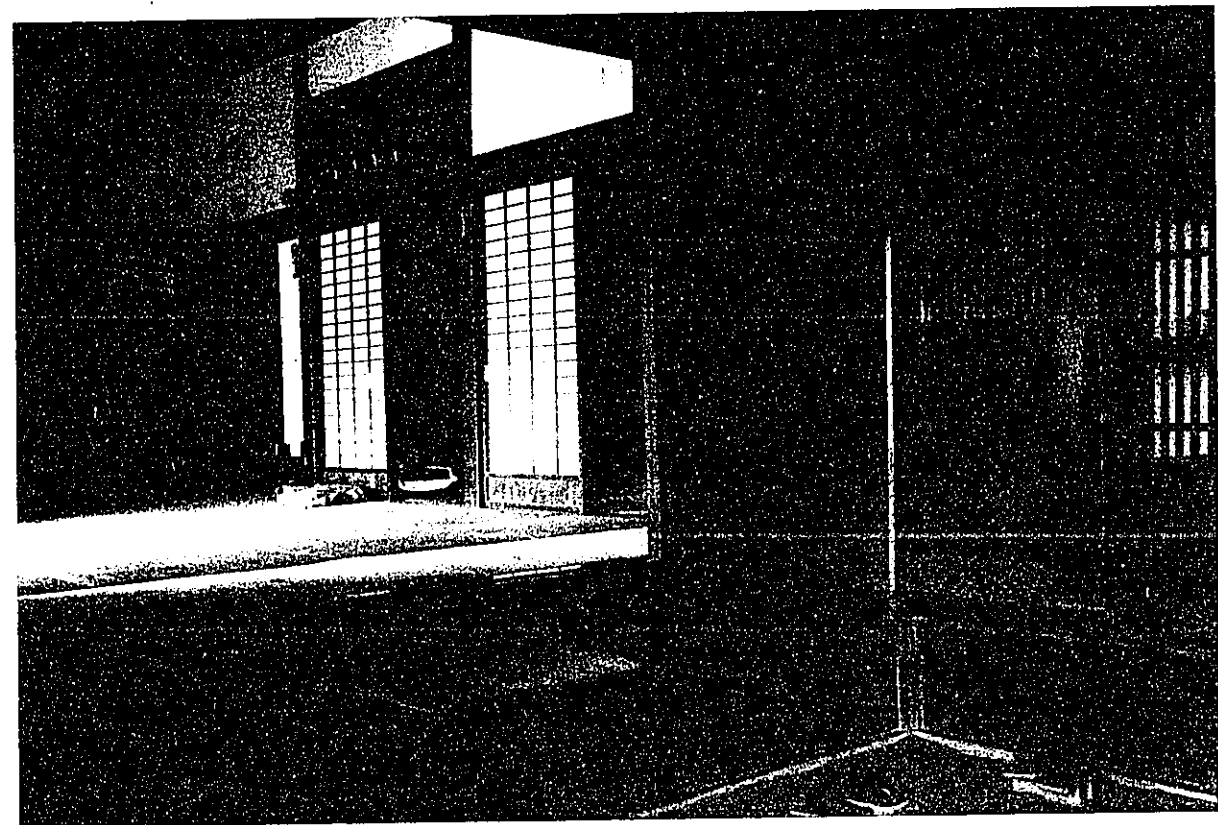
小河内村 聚落全景 4



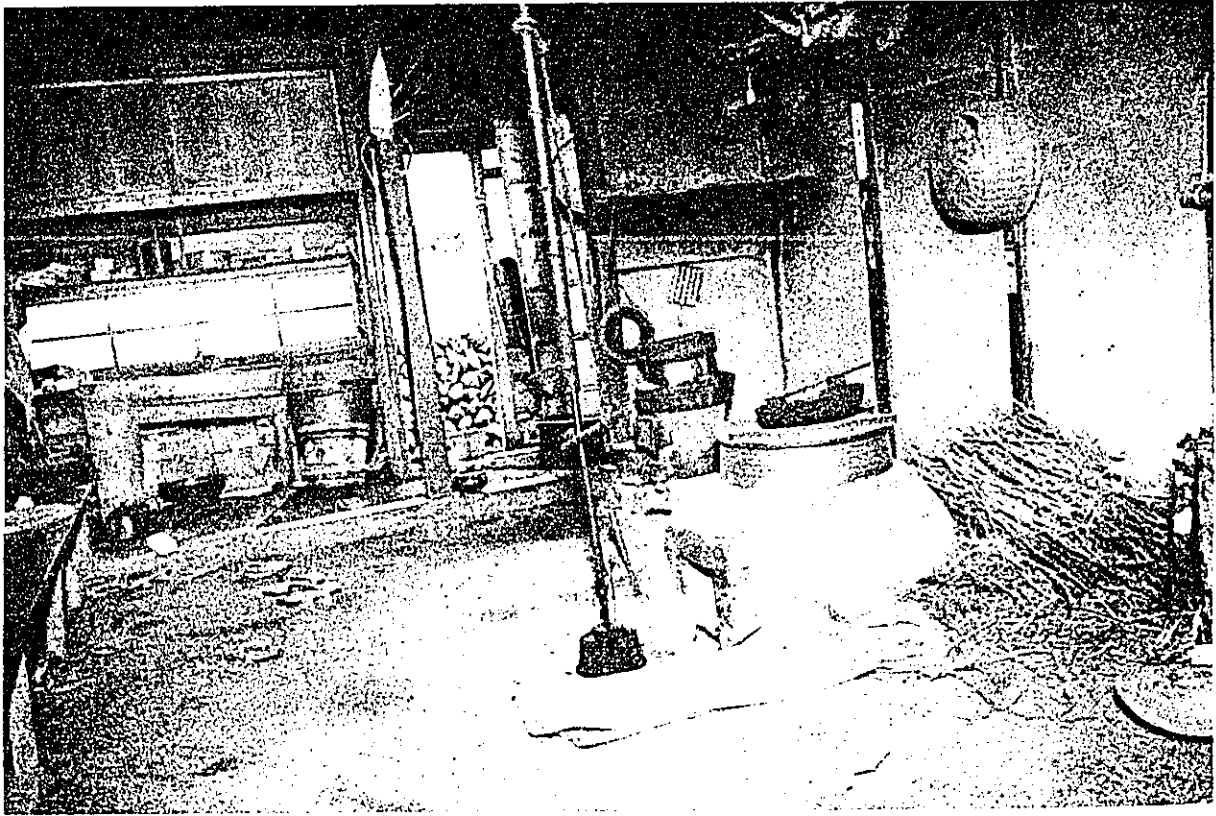
恩方村 渡邊次郎氏 5



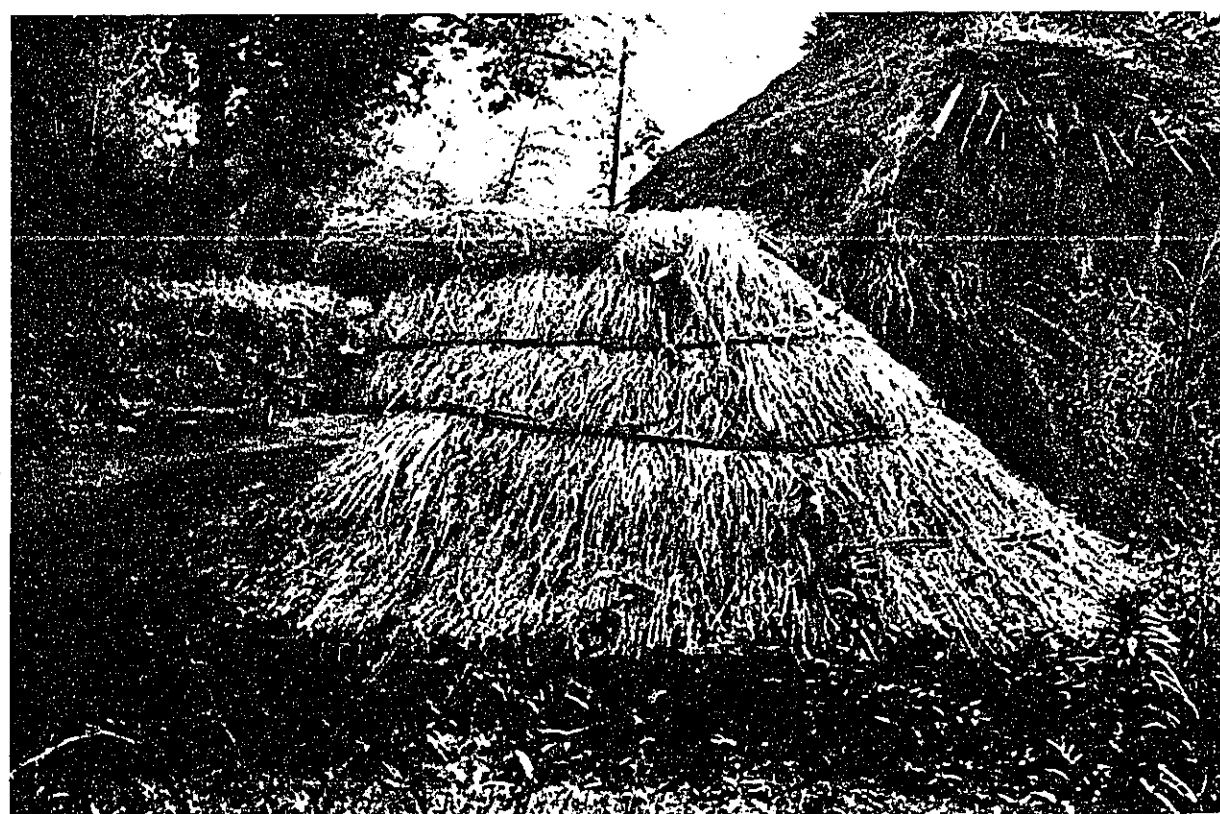
多摩村 菅澤政賢氏 6

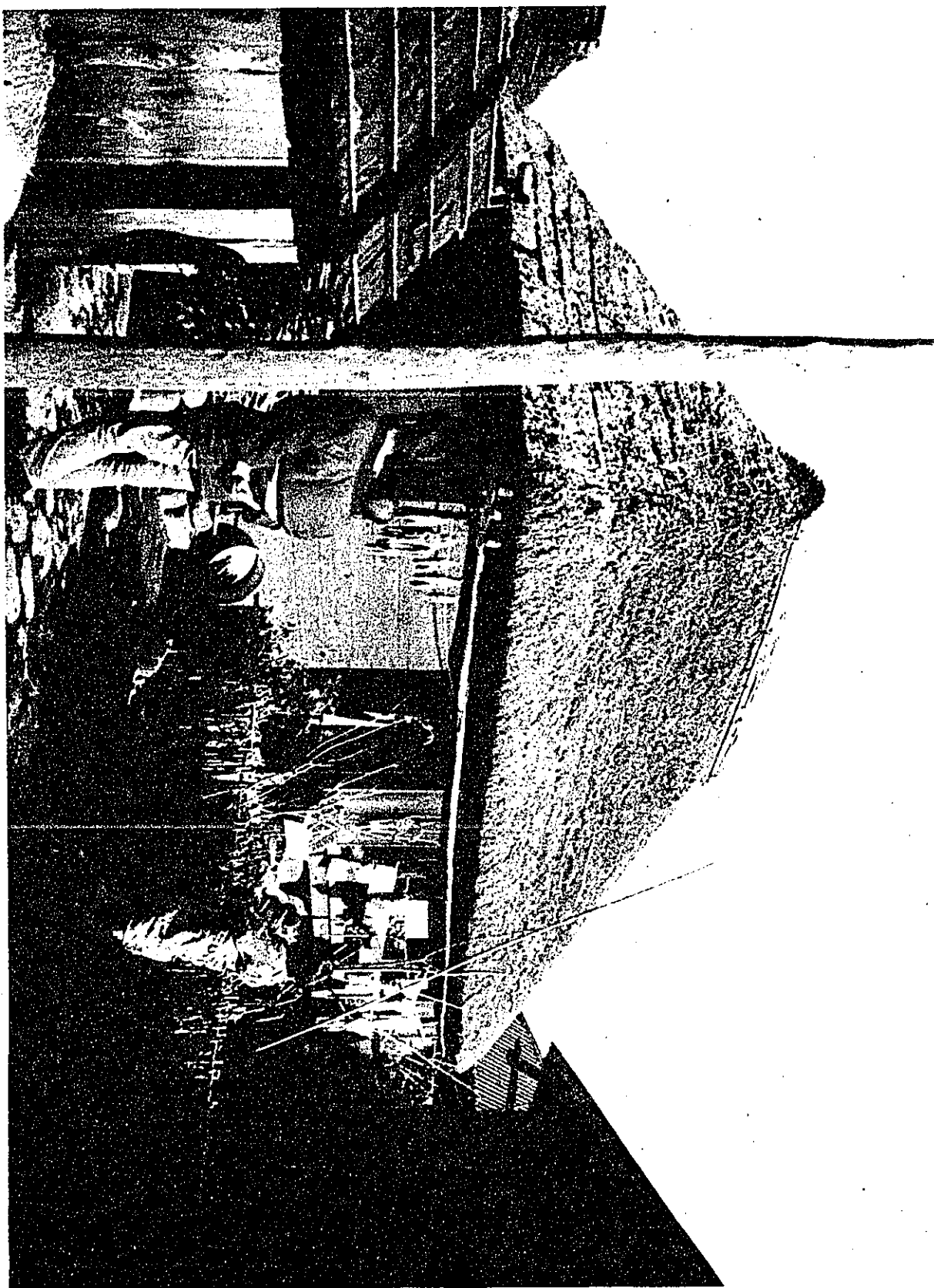


多摩村 富澤政賢氏 7



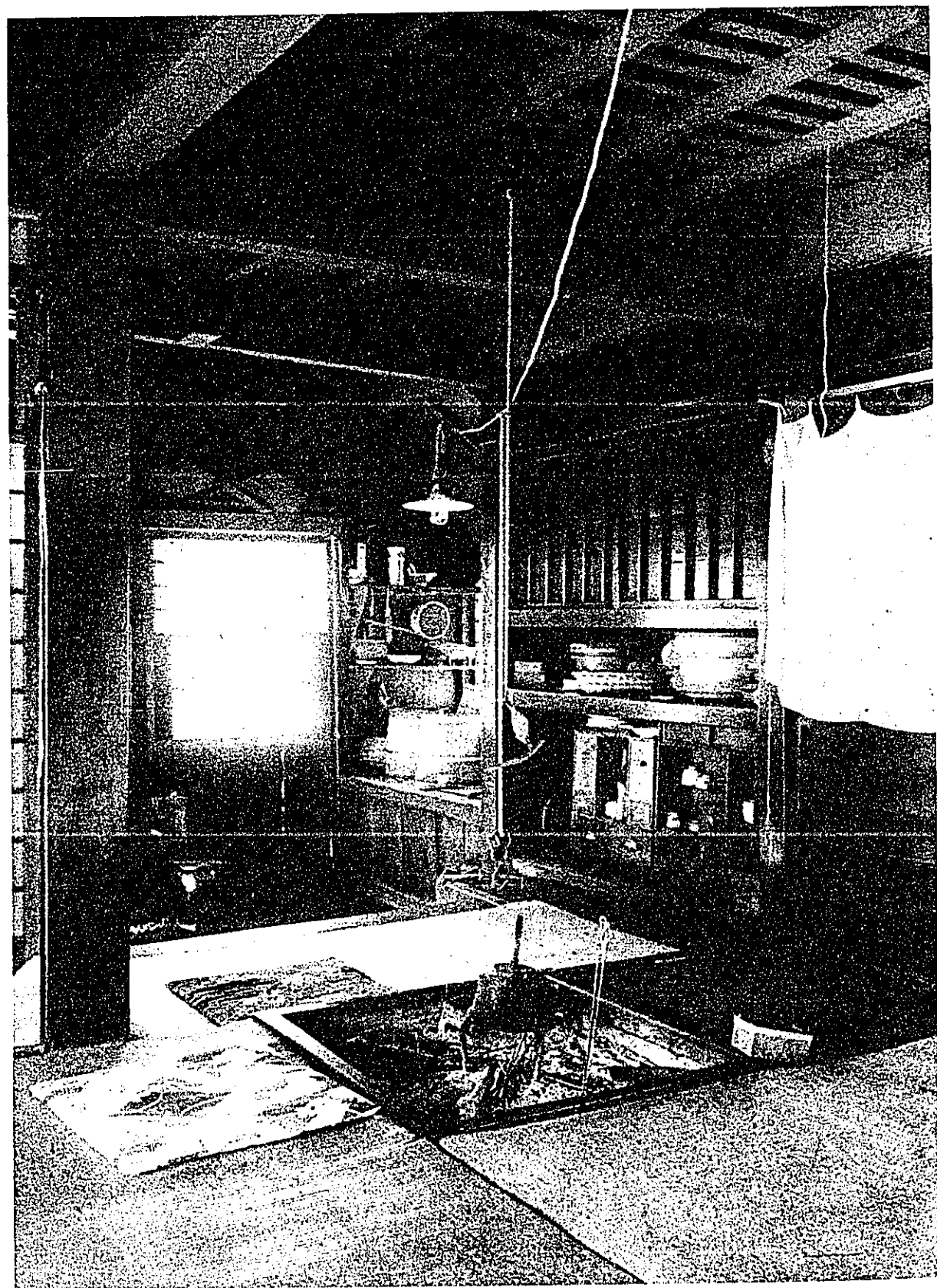
多摩村 小川龜太郎氏 8

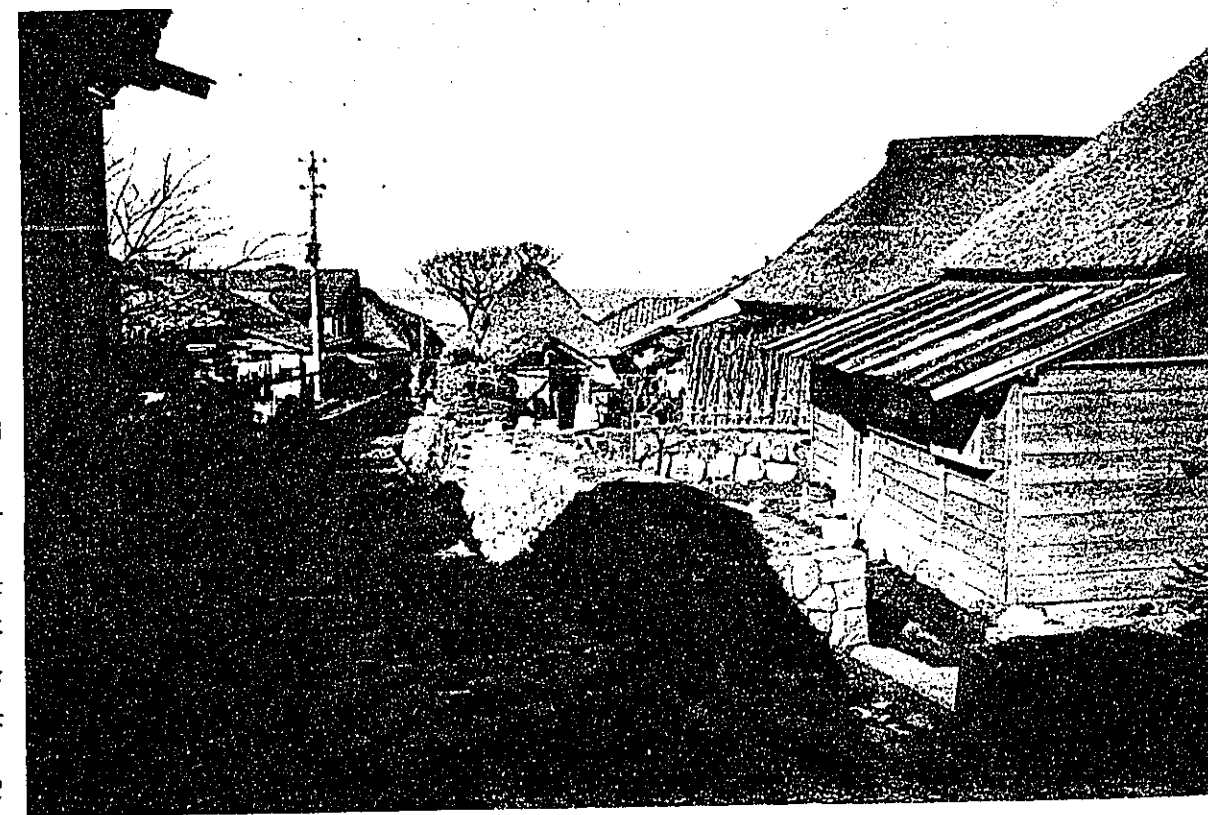




岡田村 川島渡太郎氏 10

岡田村 川島淺太郎氏 11





岡田村 聚落全景
12